

体験はすべて生きる力になる

拝啓 東北の地からおたよりします。何かを伝えたい気持ちにおかれて、書くことにしました。

約二年半前の大震災時には、全国の皆さんからご支援をいただきました。私の学校にも、西の方の学校から、励ましのメッセージがびつしり書き込まれた大きな横断幕と千羽鶴、そして大量の支援品が贈られて来ました。感謝の思いは尽きません。

失ったものは限りなく多く、深く、これからも長くかかえてゆくことになります。しかしそれは、それだけで終わりではありません。失ったという体験から、私たちは得ることもあります。

震災で得られたこともあります。自分を見つけた友が泣いてくれました。「これは当時のテレビで見た、津波の時に祖父母を手から離してしまい、自分も三日間流された閑上中学校の十五歳の少年のことばです。

体験で得たすべてのことが、生きる力の源となります。

キラキラと輝く体験。ワクワクする思い。山河や海辺でクタクタになるまで遊ぶ。友だちとの

約束。自分だけの秘密。父や母の懐^{ふところ}。

これらはもちろん私たちの喜びの記憶となっていますが、死に直面する体験も、闇の記憶として、追いはられるものではありません。大事にしていた小動物の死から身近な人の死にいたるまで、悲しい体験ですが、生きることがいやになる体験ではありません。生きることを考えながら生きてゆく体験です。だからその体験も、マイナスではなく、生きる力を得る体験になります。

私は学校の子どもたち、生徒たちと、もう二十年ほどボランティア活動をおこなっています。炊き出し鯰ティアといいます。さまざまな事情で社会生活からはずれて、路上で寝起きしている方たちへ、食事や衣類をさしあげる活動に、毎月参加しています。参加した体験を通して一人一人がたくさんの感想をもちます。初めて参加した時の、ショックからそれは始まります。公園に並ぶおじさんの数の多さ、怖い「汚い」のイメージしかなかったのがきれいな身なりにもショック、女性の方が交じっているのを見てショック、準備では、包丁^{ほうちよう}がうまく使えない自分、おむすびがうまくできない自分、何よりも次に何をしたらよいのか聞けずただおろおろしていた自分にショックをもつ体験をします。それが、参加回数とともに変化してゆきます。それは、

「ありがとう」「おいしかったよ」とかけられる言葉が耳にのこるからです。自分の普段の生活のありがたさ」を口にするようになります。

学校の子どもたち、生徒たちとこの活動をおこなうようになったきっかけは、私自身の二十歳の頃に、吸いこまれるように何げなく参加していた夜回り活動が原点になっています。その夜回りもこちらで二十年近く続けています。社会の中で人と交じわって生きることからはずれた方たちには、死となりあわせの生活があり、そこを定期的に訪問しています。私自身は、六歳の時に農薬事故により目の前で苦しみながら息をひきとる母を見取りました^{本マコ}。その体験が自分の生き方につながっていたことに最近になって気づきました。

学校のボランティア活動では、街頭募金もおこなってきましたが、震災直後から、震災遺児支援募金にしばって続けてきました。震災で親を亡くした子どもたちが学校を出るまでの支援資金です。雨の日も、暑い日も寒い日も、生徒たちは街に立ち続け、街の人たちから温かい励ましをいつもいただいた。募金活動をして、初めてお金の大切さや重みを学ぶことができました」入のためにやっている募金だったはずが、自分が学ぶ活動になりました」と、こんな感想を報告書に書いてくるようになりました。これも、募金してくださる方たちの「がんばってね」

「くろくさまね」という言葉が、心に入ってきたからです。

体験と人との出会いとその言葉が、みなさんの生きてゆく道を切り開きます。

保護者の皆さま。ひと言。子どもは、その子自身に、生きる力、切り開く力を秘めています。私の息子は、この夏上海の大学を卒業して就職しました。息子は中学時に部活動の仲間と顧問からいじめとからかいを受けました。母親は、仲間のいない高校に進めました。勉強嫌いでしたが、アメリカで日本人のいない地域へ約一年ホームステイさせました。草野球をしていたので、それで活躍しました。帰国後、文科省の交流事業で二度中国へ交流団に入って行きました。希望者が少ないので実現できたのです。その後上海の大学へ。使える英語と得意のスケボー^本を大学構内へ持ち込んで友だちをつくってゆきました。尖閣問題でゆれていた時は、授業中に教師が息子に日本批判をしたそうです。その時でも、中国の友人たちは、息子を守ったそうです。

子どもたちが、のびのびと^本体験の世界へ。